幾山河

第八號

平成７年６月１日
発　行
社団法人　沼津牧水会

目　次

島木赤彦と太田喜志子 2
牧水片々（その四）　6
第41回 沼津牧水祭
　碑前祭・芝酒盛　8
　短歌大会　9
特別展　沼津ゆかりの
　歌人歌集展10
第７回 雛の歌会　11
文化講座　12
サロン音楽の夕べ　13
来館者10万人達成　14
平成６年度事業報告　15
定款・後記　16

島木赤彦と太田喜志子

城　直樹

明治四十四年三月三十一日、長野県東筑摩郡役所より、広丘尋常高等小学校訓導兼校長兼同郡村立広丘実業補習学校長　久保田俊彦を諏訪郡玉川尋常高等小学校訓導兼任諏訪郡玉川尋常高等小学校長　久保田俊彦として転任する正式辞令が下った。久保田俊彦は正岡子規や伊藤左千夫の系譜にある「アララギ」派歌人の島木赤彦であることは周知の通りである。

こうして赤彦は同年四月五日、広丘尋常高等小学校を辞任の告別式とともに広丘村を去ることになった。四月五日は生憎の春雨が蕭々と桔梗ケ原をけぶらせていた。この桔梗ケ原の景色を見とどけたいという赤彦に同校訓導の中原静子とその後牧水夫人となる裁縫教師の太田喜志子のふたりが送別を惜しんで同行したのである。赤彦にとって同校の歌の門人として静子・喜志子ら数名の女流歌人にかねて万葉集を説き、作歌を教えていた関係から親近感があったに相違なく、そのことを踏まえて赤彦も広丘を去る惜別の情を次のような憂愁を湛えた短い詩によんでいる。

島　木　赤　彦

桔梗ケ原の土となり
瘠せたる松の木の下に
人を立たすに忍びんや

静かなる木よ残れかし
旅なる人よ去れよかし
愁ふる足よ歩めかし

広丘村で静子と喜志子に送られた時、人目を避けて、敢えて遠まわりの道をして塩尻駅へのコースをとった。信濃の遅い春にようやく山の辛夷（こぶし）の白々と咲く風情を語りながら思いを深め合うのであった。その静子はかって、

先生を恋ふ

家をめぐるげんげんの花は盛りなり先生をまつ
喜志子もわれも
うつろなる心は何ぞ堪へがたきこの寂しさは秘
めし命ぞ

という一連の作をよみ、歌や文学に魅了され、敬愛から愛への変容の一端ともみえるこれらの歌に喜志子がおり、乙女心の揺曳を窺うことができる。この「先生」は往時の校長であり、歌の師でもある久保田俊彦こと島木赤彦であることはいうまでもない。赤彦が同校の校長をしていた時の裁縫教師時代の太田喜志子のことはあまり詳細に知られていないが、歌も作り、詩作にも熱中していた喜志子に「アララギ」へ入会し投稿を勧める赤彦の意見には従わなかった。

すでに河井酔茗の「女子文壇」や与謝野鉄幹の「明星」の浪漫歌風に親しみ、今井邦子（当時山田邦子）、生田花世（当時長曽我部菊子）らとともに花形と称される女流の一人となりつつあった喜志子にとっては、地味な写実に徹する赤彦の歌風

島木赤彦（明治44年３月28日）

にいささかの躊躇があったと考えられる。

喜志子二十四歳のころであるが、広丘村字吉田の太田清人四女で姉三人兄一人、その下に弟二人と妹一人の計八人兄弟の中で育ち、病弱な母ことを気づかい死への恐怖に脅かされながら成長した。昔気質の祖母の厳格な躾の中で養育され、後の喜志子の性格に多大な影響を与えたといわれる。夢多き娘時代であるべき少女期を農村の隠忍自重をよしとする風潮とともに、病弱な母への憂鬱な空気や死への懸念の中で、怏々として過ごしてきた喜志子が、希望を見出すとすれば、松本市に出て女学校へ進むことであった。しかし多くの家族と病弱な母を抱え、家運の傾きかけた太田家で可能なことは家事を手伝いながら、村の小学校の補習科へ通うくらいが精一杯のことであり、それだけで満足できなかった。やがて喜志子は読書を通して文学の中に光明と自由の世界を発見していくのである。高等小学校の時の教師小松秀一が太田水穂や窪田空穂らと親交があったことも関係して、作歌にも興味を持ちはじめていた喜志子が、次第に詩の世界にも心ひかれて、特に『藤村詩集』を耽読するようになっていた。一方信州の文学青年で岩淵要や矢島敏弼という新進気鋭があり、ある種の憧憬を抱くとともに、牧水の歌集『別離』を喜志子にも推賞していたといわれる。

明治四十四年の早春に東京で歌誌「創作」を創刊して次第に注目される中で、喜志子はそれ程牧水に関心が強かったわけではない。喜志子の家庭環境や生来の資質とあい俟って、軽率に不和雷同せず、自らの見識と判断による言動には往時の女性としては珍しく主体性が感じられるところがある。

喜志子の島木赤彦との出あいとその別れに触れた次のような一文があるので紹介しておこう。

柿の村人先生時代　　若山喜志子

私が島木さんと一番親しくお近づきしてゐたころは、明治四十二三年で、彼の

草枯の野のへにみつる昼すぎの光の下に動くものなし

と詠まれた、私の郷里広丘村の松林のかげの小学校に校長をされてゐたころであった。

其の頃島木さんと同じ下宿に居られた女教員の某女史がアララギの会員であったり、私と親しい間柄であったりしたので自然その下宿にも遊びに行った。そしてよく歌の話で夜を更した事もあった。

冬枯の野に向く窓や夕ぐれの寒さ早かり日は照しつつ

その窓の下で三人して、ぽつりぽつり話しながらお茶を飲んだ事など、今更らしく思ひおこされる。

小夜ふかく炬燵にゐつつ庭つづき原なることを淋しみにけり

その炬燵辺のことなど思ひ出される。島木さんはよく「おれやない、」とか、「さうかない」とかいふ諏訪言葉をそのままお使いになった。そして極めて口重な方で、どちらかと云へば淋しい位であった。（中略）

この森の奥どにこもる丹の花のとはに咲くらん森の奥どに

眼のまへにその人はありとこしへに消えてゆくべきこの人はあり

のお歌をのこして島木さんは林の村をお去りになった。島木さんの最も最後のお別れを惜しんで、人目をさけて心ゆくまで別れを惜しむためにわざとまはり道をして遠い停車場まで春雨の

若き日の若山喜志子

けぶる中を歩いた島木さん、そして或一人の女性、私、この三人がどんな思ひをして歩いてゐたか、私は間もなくその時の人々の心を知ることができたのであった。

たまさかに人のかたちにあらはれて二人睦びぬ泪ながるる

島木さんがお退きになってからの村の学校は淋しい。いたましいものがかずかずあったけれど、それはここに記すべき性質のものではないから中止しておくことにする。間もなく私は村を出て上京して仕舞った。（「アララギ」―島木赤彦追悼号―第十九巻第十号・大正十五年十月十日発行）

少し長い引用文であるが、喜志子の島木赤彦との出あいと別れの状況を彷彿とさせるところがあって、若い喜志子の時流に動じない意志を感じさせて、その人となりが窺われる。

この時の赤彦の転任の大きな理由は、女教師中原静子との醜聞が世間で取り沙汰され、収拾がつかない域に及んでいたため、窮余の一策としての処置であった。この道ならぬ愛の経緯は『桔梗ケ原の赤彦』や『丹の花』をはじめ、川井（中原）静子遺歌集『去りがてし森』の多くの相聞歌に顕著にみられるところである。

若山牧水

当時の同僚や村民は世俗的風評として、単なる好奇の眼で見ていたに過ぎなかった。喜志子がこの二人の秘事をその尊厳において、黙秘し同情していたことは先述の一文からも推察されることと思う。

大正四年に刊行された喜志子歌集『無花果』の中に次のような望郷と回想の二首がある。

わが信濃をとめ心のほのほさへとりよろふべく青き山々

その信濃まして恋しきをとめどちほのほとなりて物思ひたまへ

もしかしたら桔梗ケ原を赤彦や静子らと散策したころを遥かに懐かしみよんだものではないかと思われるところがある。

赤彦が広丘を去ったあと、喜志子の兄が結婚したのを好機として、両親はもとより親戚さえ反対する東京への出郷を決意していた。

同郷の太田水穂が松本高女の教諭を辞して、日本歯科医学校教授に就任し、四賀光子と結婚していたことも喜志子にとって強力な足がかりであった。太田水穂へ綿々とその真情を綴り、上京を依頼する書簡を送った。こうして水穂の取りなしのお陰で太田家の女中代わりの家事手伝役をかねた東京生活に入ったのである。

明治四十四年七月の暑いある日のことであったが、太田水穂を尋ねて浴衣を着たあさ黒い風采のあがらない男が玄関に立っていた。水穂と対座しているところへ喜志子は茶菓を運び、はじめて若い牧水を知った。牧水との初対面で印象に残ったのは純朴でその眼が澄んでいたことだったという。

喜志子は水穂のお世話に感謝しながらも、文学書を読んだり作歌を続けながら、やがて同年十月十日ころ、東京市外内藤新宿二丁目十四番地森本酒店二階の一室を借り、越前屋という遊廓からの依頼の着物を縫って、自活の途を探しあてたのである。このあたりにも自主独立心の旺盛な喜志子の意志力をみることができる。このことを信濃の広丘の病弱な母ことが知って、

ただ一人ををしくたたんそのかくご母は思ふぞ遠くありても　琴女

と喜志子が生家で愛用していた朱塗りの角盆に子を思う親の心境を直接墨で書きつけて送られるとその母の深い愛情を涙ながらに受けとめたのであった。その後の牧水と喜志子との関係は多くの紆余曲折を経て、やがて牧水に望まれて結婚することになるのであるが、

もろともに見かへる雪の峯々は悲しや霞のなかを走れり

かなしやな信濃の春はまだ暗し君は桜か東京へ帰る

うす青き信濃の春に一つぶの黒きかげ置き君去ににけり

牧水が当時出版した『牧水歌話』の扉に「今日

晩年の若山喜志子

の記念に、四月二日、牧水、太田喜志子様」と自署してあたかも、ささやかながら結納でも渡すように喜志子へ差し出したという。その日は喜志子と長谷川銀作の妻となったその妹桐子（潮（うしお）みどり）が塩尻駅で東京へ発つ牧水を見送った時の三首ではじめて喜志子から牧水に贈った歌であった。

かくて、牧水と喜志子がめでたく結婚したのは明治四十五年五月五日、信濃より喜志子が上京した日である。喜志子は牧水との生活に入っても経済的に恵まれず、信濃広丘の実家へ足を向ける中で、赤彦から手紙をもらうのである。同年十月二十九日、赤彦が上京して神田神保町日芳館支店から帰省中の喜志子宛ての一通の書簡によれば、

太田水穂を訪尋した赤彦は、喜志子の様子をつぶさに聞き、気懸かりがないわけではなかったらしい。そして昔日の広丘での静子や喜志子らとの楽しい散策や語らいを回想し忘れることはなかった。牧水との結婚生活に入った喜志子は経済的窮乏にあえぐ家計を支えるために、遊女の着物を仕立て精一杯の努力をしても一向に解決する見込みは立たなかった。

旧広丘小学校

牧水の父の重態による宮崎への帰郷や、短歌誌「自然」の創刊と資金難による挫折、さらに牧水歌集、『死か芸術か』の出版とその苦悩等々幾重もの苦難の中であえいでいた。

牧水の経済的な行き詰まりは尋常一様なものではなく、当時の生活は破綻同様で、牧水の近親からも宮崎へ帰郷して着実な生活の立てなおしを勧告されていた。

喜志子も牧水とともに宮崎の地へ同行する決意をするべく、島木赤彦にも相談していたらしい内容の喜志子宛て赤彦書簡の一文がある。後の喜志子と赤彦とは歌の方向もその評価も異質なものとなっていくが、喜志子の青春期における歌人的出発点の伏線的存在としての赤彦との関係は、あまり語られていない。信濃の広丘村という地理や風土との客観的両者の共通点をもとに、歌の縁（えにし）とともに生活や文学上の出逢いの不思議も含めて興味深いことだと思われてくるのである。

城　直樹　歌人

本名　関口昌男。

日大三島高等学校教諭。

歌集「朝明けの海」「冬の鷹」

著書「中村憲吉とその周辺」

牧水片々（その四）

牧水との旅の記憶

若山旅人

名古屋から大阪へ

大阪はいかにも派手で賑やかだった。というのは、牧水を待ちかまえていたH氏、O氏を始めとしてM、N、T氏らすべてがまだ三十代で、しかも各方面に名を成した気鋭の同勢だったからである。割れるような騒ぎの中で牧水父子は引き回されて翌暁に到ってしまった。ネオンは未だ無かったがキラキラしたイルミネーションに彩られた大阪の夜景は目を瞠るばかりだった。道頓堀のカフェーでは吾われ一座は他を圧倒した。牧水が起って朗詠を始めると他の席も静かになって何が何だか訳が判らなくても聴き入ってしまう。やがて又もとに戻った時隅の方の席からひやかしの声が上がった。それを聞いた途端、H氏が立ち上がった。背が高くやせて眉が濃く光り髭が一文字の彼は、当時最も血気さかんで喧嘩早かった。形相が変わったのを見るや忽ち同席のO氏のひと声があった「H！　またかッ！」。それを聞いたH氏は顔を歪めて卓に突伏し泣いた。顔の下で震えていた手先が動いて卓上のグラス盃に手が届くと、それを探していたかのようにその指先はそれを掴んだ。忽ち、カリカリッという風な音がしてそれは握りつぶされた。血が噴き出して白い卓布の上を拡がって行った。女給たちが寄って来て後始末がされる。「ああおそろし！」と云うような言葉が彼女たちの口から洩れ、そのひやかした客は姿を消してしまった。「待てエ！」などとH氏は叫んでいる。この店に来る迄に既に三店、四店と同勢は経めぐって来ていたがこの店もこうして出てしまった。牧水はご機嫌である。横ならびになって通りを狭くし乍ら一堂は当てもなく歩き、牧水は高笑いなどしている。彼のこの夜の文章を見ると既にこの頃迄に大事な作歌ノートを失くし誰やらに供された高価な（牧水の言）西洋煙草も何処かに落としてしまい、名刺入れも置き忘れて了っている。私にとっては驚く事ばかりだったが、大阪の南界隈は夜中を過ぎてもまだ織るような人波だった。やがてしてH氏は又もや吃驚する事を始めた。この人混みの中で同行の一人の婦人を矢庭に振り回し始めたのである。Mさんという若い小柄な綺麗なひとだった。社内でもおとなしく佳い歌を作っていて、のちのちに私は知らされたがH氏にとって特別のひとだった。エーイ・エイと叫び乍ら彼は彼女の両手を掴んでブンブン振り回す。忽ち人波はその円周に従ってまるくあいて行くのだ。彼女は少しも声を出さなかった。

歯を食いしばって目を閉じている。草履も飛んで了って白足袋が夜目に際立って見えた。H氏の酔った悲痛はこうでもせねば収まらなかったのだ。牧水もさすがに目を見張っていたが動じた気配はなかった。する儘にされて無言だった。牧水が本当に感情を丸出しにして言動したのはその続きで、神戸まで行って同行の一人N氏の新婚早々の家に大勢で転がり込んで了った時である。牧水は手をつくようにして無礼をすまながっていた。

神戸から広島への車中

父子を乗せた急行列車は瀬戸内海を見渡して走っていた。その頃の山陽線は今とちがって三原、広島間は呉回りの海沿いを走っていた。食堂車は、私たち父子と通路を隔てた向かい合わせの卓にいる肥った中年の西洋婦人と三人だけの客だった。当時はいつもこんなに列車は空いていたのだろうか。しかも沼津を発った時と同じくこの時も外人と縁があった。

牧水は陶然としてガラスの猪口を重ねている。大阪での私の驚きの数々を黙ってうなずいて聞いている。隣の西洋婦人が指をあげてボーイに勘定書きを持って来させた。そして暫く仕手から急に怒り出した。レシートの一部を指し示して怒っている。ボーイでは間に合わなくなって車掌が飛んで来た。婦人はもう起ち上がってオペラ歌手のように手を振り胸を張ってペラペラ怒っている。無声映画しか無い頃だったから、その時の私には外国語のアクセントが珍しかった。

「何を怒ってるの？」と訊くと父は「葡萄酒が高価いンだってさ。すこし酔払ってるンだ……」。と言う。見ると卓上にはワインが一本立ってカラになっている。今になれば私にも理解できるがこの婦人の怒りももっともだ。生活習慣として日本でのワイン一本と、外国の食事どきのそれとでは値段の習慣が全然違う。気の毒に日本の事情を知らないのだろう。車掌にもそれを理解させる会話のちからがない。

「お父さん、説明してあげてよ」と私は言った。その時の牧水の顔は見ものだった。私はうっかり早稲田の英文を出ている父親に信頼を置いていたわけだが、息子のそれに直面したときの牧水の困惑と動揺の表情は、見ていても気の毒になった。

山奥から出て来たお爺さんのような顔になってしまったのである。

―つづく―

――牧水は大正十三年（一九二四）郷里の母親を沼津に呼び寄せようとして、仲々一筋なわでゆかぬ母親の勧誘役にと息子の私をつれて父子の旅に出かけた。七十年昔である。私は小学三年だった。ひきつづきこの旅の様子を連載したい。今回で第二回だから第五回辺りまでつづくだろう。と思う。

旅人――

第41回 沼津牧水祭 碑前祭・芝酒盛

鏡割り

千本松原をこよなく愛し、松を伐採から救ったことでも知られる沼津ゆかりの歌人若山牧水を偲ぶ恒例の第四十一回沼津牧水祭が、十月十六日、千本浜公園にある幾山河の歌碑前で行われました。

来賓や牧水短歌のファンなど市内外から約七百人が出席。碑前祭では、林茂樹沼津牧水会理事長が「牧水の愛した千本松原を守り、文化活動の発展に努力していきたい」と挨拶。

次いで来賓の五月女武沼津市教育長が「秋の風物詩となった祭りで、牧水と同じく心豊かな一日を過ごしましょう」との祝辞を述べました。

続いて、当記念館館長の若山旅人氏が歌碑に献花、献酒したあと挨拶に立ち、「父牧水のためにお集まりいただき、ありがとう。私が九歳の時、七十二年前に沼津に来た時は駅から千本浜を見渡すことができた」と、遠い記憶をたどり、「来年は(平成七年秋)、今日用意しながら忘れたメモを紹介します」と、次の再会を誓い、牧水祭の歴史を感慨深げに語ったのが印象的でした。

この後、沼津合唱団、花柳稔一門の皆さんによる歌と踊り、沼津松波会の煙火太鼓や詩吟なども披露され、名物のおでんを肴に地酒「牧水」をくみかわす芝酒盛がにぎやかにくり広げられました。

牧水没後六十六年、牧水を偲び楽しいひとときを過ごしました。

また、平成六年度、第五回中学生短歌コンクール表彰式も行われ、応募六百九十五首(人)から特選に選ばれた十人が表彰されました。

杉山　千尋(長井崎二年)　大嶽　有理(愛鷹二年)
大村　友美(長井崎三年)　鈴木　智恵(愛鷹二年)
伊達由見子(長井崎三年)　瀬川　陽介(愛鷹二年)
川口　陽子(静浦二年)　松野　佑香(愛鷹二年)
増田佳奈子(愛鷹二年)　遠藤　大志(第五三年)

賑わう、芝酒盛

記念品を受ける
中学生入賞者

第41回 沼津牧水祭短歌大会

日時　十月二日（日）
会場　沼津市立図書館

春日真木子先生のご講演

水甕選者・発行者の春日真木子氏を迎えて、第四十一回の牧水祭短歌大会が昨年に続き市立図書館四階の視聴覚室に於いて行われました。午前は、春日真木子先生の講演で、近代短歌の先達の作品から現代の若手の作品までを引用しながら、各作品の見方、その根源に触れ、短歌の大きな流れを示され、また午後の作品批評では、描写を大切に物について心を表すことを強調されました。

牧水賞一席（選者選一位）

釘を打つ音絶え間なくきこえゐて真夏の暑さつなぎ合はさる　清水市　久保田たか子

牧水賞二席

花も終りの実を抱きながらわらわらと哭くごと立ちて向日葵は在り　伊東市　堀内　裕子

牧水賞三席

蜜をもて煮つめし胡桃その森の深さを思ひゆつくりと嚙む　沼津市　石川　義倫

他に選者選として次の七首が選ばれました。

○不揃いの湯呑ならびて異れる価値観渦巻く団交つづく　浜岡町　真島　正義

○カット台の汗の手首に触れてくるエーテルのごとき丸鋸の風　藤枝市　武藤　房江

○豆もなすびも待ち構えては獲られけり観察日記終らむとして　沼津市　青木　朝子

○花と水の駅名列ねてその奥に万病に効く湯治場は在り　清水市　飯田ふみ代

○遺児ふたりと西国めぐりの若き母　桃の実ほどの薄化粧して　清水町　向笠　律子

○どろどろの熱き過程もありまして目にも涼しき心太かな　清水町　杉山　郁代

○髪を濡らし顔を火照らせ帰りくるランドセル負う衿搦羅童子が　清水市　梶原　喜美

なお、互選の上位は次のような作品でした。

市長賞（互選一位）

諍いも妥協もさみし畑に来てみどりしたたる菜の薹を摘む　大仁町　山中さち子

市議会議長賞

人気なきローカル駅にカンナ炎え錆色の貨車がにぶき音たつ　沼津市　石丸登美子

教育長賞

不揃いの湯呑…　浜岡町　真島　正義

商工会議所会頭賞

花の種袋のままに吊されて母の命のこの夏ほそく　菊川町　樽松　文子

観光協会会長賞

ついてゆくわれを時折ふり返り歩き始めし子は陽に向きて行く　富士市　福西美枝子

沼津朝日新聞社賞

わが飼える蜜蜂ならん蓮華田にくぐもる羽音立ち止まり聞く　土肥町　新田りつ子

マルサン書店賞

水瓶の白き睡蓮に目を止めて配達人は汗拭いており　三島市　新井　愛子

互選八位

寄り添ひて語りゆくがに流灯の揺らぎて二つやゝに後るる　沼津市　青木　初音

互選九位

あらそいのまなかにあれば孫つれて夕べの街にまぎれいでたり　函南町　加藤　侃子

互選十位

国後島を望む原野の枯れ色に立てば草喰む馬の眸やさし　函南町　嵐田倭文子

特別展　沼津ゆかりの歌人歌集展

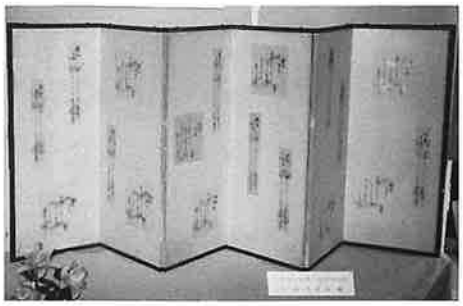
入口風景

沼津市教育委員会との共催で七月二十六日から八月二十八日まで当記念館ラウンジで特別展「沼津ゆかりの歌人歌集展」が開催された。

今回の特別展は、須永実行委員長を中心として一年以上をかけて資料集めに奔走し、開催にこぎつけたものである。万葉から現代まで、沼津市にゆかりのある歌集や歌会にちなむ古文書など約百点を一堂に集め展示し、作者をパネルで紹介した。万葉集に収められた、上香貫に住んでいたと考えられる玉造部広目の一首をはじめとして、年代順に作品を並べることによって、各年代における短歌の位置付けも〝読みとれる〟配置となっていた。

時代もさがり、江戸末期の国学者やこの地方の網元、名主などの〝文化的たしなみ〟として詠まれた歌集、古文書も口語訳を付して展示され、続いて明治に入り「沼津風（ぬまづぶり）」を発行した沼津短歌会の生活に密着した写実的な内容への移行も分かるようになっていた。当時の沼津短歌会の中心となった槇不言舎の「不言舎集第一巻」や初代沼津市長を務めた和田伝太郎氏の『虫聲如雨』をはじめとして、「東海短歌」の創設者　故積惟勝氏や「山脈」の創設者　故伊藤祐輔氏など多くの歌人の作品が出品され、この他、福島泰樹氏の『さらばわが友』、アララギの『落合京太郎歌集』などが紹介された。

また、大中寺所蔵の入江為守氏の「沼津十八景」を詠った屏風も来場者の興味をひいた。なお、展示期間中、歌人城直樹氏の記念講演「明治期の沼津短歌会と槇不言舎」が開かれた。


「沼津十八景」　大中寺所蔵の屏風

展示風景

会場の展示品に見入る来館者

第七回　雛の歌会

平成７年３月４日㈯
沼津市若山牧水記念館
講師：和　泉　鮎　子　氏

恒例の「雛の歌会」が三月四日（土）に木俣修門下の俊英和泉鮎子氏を講師に招聘して行われた。東京から関東東海は大雪という予報がやや外れて東京は雪は降ったが積もらない程度と言う。しかし肌寒い日であったが、なごやかに、きびしく歌会が繰り広げられた。

今回の雛の歌会は、出席しなければ何のメリットもないというスタイルが知れ渡る中で、投稿だけという人が少なくなり、出席を前提とする投稿で、出詠五十二首、出席四十名と例年に比較すると大分少なく、従って余裕のある会になったように思った。批評は出詠の五十二首全部についておこなってもらった。報告はまず和泉鮎子先生の選ばれた五首の紹介から始めよう。

此の寺も遠きいくさに関わりて一俵炊きの釜軒下に古る　　真島　正義

遠きいくさが何のいくさか、具体的に言ったほうが此の歌の場合は生きるのではないかという注文に納得。一俵炊きの釜がイメージをくっきりとさせていると評価。なお、この作品は互選でも十五点を集めて一位であった。ただ真島氏は小笠郡浜岡町の方で、参加を前提とした会であることを御承知かどうか案ずるところである。

銀線を長く引きゆくなめくじの夜の反逆も忘れてやらむ　　熊切　なか

上句から下句への転換が見事である。飛躍・省略が効いていると評価。熊切さんも小笠郡大東町の方。

夜の明けの次第に早くなりにけりめじろは餌場に昨日より来ず　小野美津子

季節の変移がさりげなく歌いこまれていて、そこに作者の日常がでていると評価される。

くもりたる眼鏡拭ふはいく度か木の芽おこしの雨あたたかし　深谷　治子

湿度の高さを眼鏡のくもりで表す、木の芽おこしのおこしの使い方は容認できるが、くもりたるのたるは過去完了なので現在形のゐるではないか。

出奔のすでにかなはぬ齢なれ枝に乾びし鵙の速贄　前田　鉄江

老いの自覚・青春への感慨。下句はイメージの投影で、唐突のようだがどこかで結びついていると評価。

次に互選の高点歌を紹介しておく。

○入院もせず老母は身罷りぬ点滴の鉤鴨居に残る　飯田千枝子
○張る乳房赤くゆらして野良犬はひたひた路地を急ぎゆきたり　高橋　啓一
○登山道コアラの如く木にすがり息整ふる妻ぞをかしき　花木　成蹊
○加湿器の湯気ほのぼのと上る部屋みどり児しきりに手足動かす　芹沢　ふく
○満天星の朱しずもりて沼を囲む径ひとすじに屋根へとつづく　塩谷千鶴子
○命綱風にゆれいる尾根の上忍者のごとく動く瓦師　山中さち子
○「古来稀」の自覚もなしに老人の健康手帳受くるとまどひ　土居良太郎
○陰り来る段々畠に畝隔て草抽くわれらときに声掛く　青木　朝子

他に特に記録しておきたいことは、言葉の重複はそれだけで作品の質を落とす。言わなくてもわかることは省略しないと密度が濃くならない。時事詠は時を越えて残るかどうか、しかし、歌って置きたい事。独自性と言うか、視点をきちっとさせて歌うことが必要ということで、その事件そのものを歌うのではなくて事件なり事故から何を感じたかが大事という意見であるように感じた。もう一点、リズムは大切で、五七五七七の中に納める工夫は当然だが、字余りに拘らない事も大切。声に出して読むことで、字余りの方がリズムが合えばそうした方がいいと、白秋の例歌を紹介しながら語られたのが印象的であった。

（須永秀生）

文化講座

●「明治期の沼津短歌会と槙不言舎」
8月6日(土)　14:00〜16:00
講師　城　　直　樹氏

●「山崎　剱二と沼津」
平成7年3月11日(土)　14:00〜16:00
講師　岩　田　　勗(さやか)氏

●朗読とギターの夕べ
11月19日(土)　18:30〜20:00
朗読　伊藤 弘子氏　ギター　松本 平行氏

サロン音楽の夕べ♪

▲アイルランド民族楽器によるサウンドとトーク
4月9日　18:30〜
出演　守安　功・雅子

▼赤坂達三のクラリネットと寺嶋陸也のピアノ　5月28日　18:00〜

（伊東千里撮影）

▲「夏の宵はボサノバで陽気に！」
7月10日　18:00〜
ベース　金沢　英明
ドラム　ナアメ・M・ガゼブ 他
フルート　城戸　夕果

▼コーラス「みんなで歌いましょう」
10月8日　18:30〜
男声コーラス「ポコス」他

▲中川昌巳のフルートと福田進一のギター
10月10日　18:00〜　（伊東千里撮影）

▼ X'MAS コンサート
林　光の「宮沢賢治」　12月11日　18:00〜
ピアノとトーク　林　光
チェロ　安田謙一郎

（伊東千里撮影）

▲御喜美江のアコーディオンと
崎元　譲のハーモニカ
7年3月12日　18:00〜　（伊東千里撮影）

おめでとう！　石井　敦司君

来館者10万人達成

沼津市若山牧水記念館は、平成六年七月一日、入館者が通算十万人を突破しました。昭和六十二年十一月一日の開館以来六年八か月での達成で、関係の皆様方から予想以上のハイ・ペースだとの評価を得ました。

十万人目に当たった入館者は、川崎市の小学五年生の石井敦司君（10）で、父親の雅夫さん（43）、母親の洋子さん（40）、兄の中学一年生智史君（13）と共に記念館を訪れ、思わぬ幸運にめぐりあいました。石井君一家の住む川崎市が、この日、沼津市と同じく「市制記念日」に当たり、学校が休みであることを利用して、以前から希望していた特急「あさぎり号」に乗って沼津にやってきたとのことでした。

石井敦司君は、五月女武沼津市教育長、本会林茂樹理事長ほか関係者の見守る中、拍手で迎えられ、「幾山河……」の牧水の短冊や絵はがき、テレフォン・カードなどの記念品を贈られました。

お父さんの雅夫さんは、「前から特急あさぎりに乗りたいという子供たちの希望をかなえるため、沼津を選びました。駅の案内板で若山牧水の記念館のことを知り、私共の住まいの近くにも牧水の歌碑があることから見学にやって来ました。でも、まさかうちの子供が十万人目になるとは驚いています。大変うれしいです。良い思い出になりました。ありがとうございます。」と喜んでいました。

平成６年度事業報告

総会（第８回）　６年４月28日(木)　19：00〜20：10

理事会　第１回（通算41回）６年４月19日(火)　18：00〜19：20
　　第２回（〃　42回）　〃　８月３日(水)　18：00〜19：10
　　第３回（〃　43回）　〃　９月１日(金)　18：00〜19：10
　　第４回（〃　44回）　〃　12月25日(月)　18：00〜20：30
　　第５回（〃　45回）７年３月10日(金)　18：00〜19：30

館報発行
　第13号　６年11月15日
　第14号　７年３月１日
会報発行
　第7号　6年6月1日

調査研究事業
　東京牧水会への参加
　　６年９月10日(土)
　　東京都千代田区九段南4-8-2　宮崎県東京ビル　須永理事参加

沼津牧水祭（第41回）
　短歌大会　６年10月２日(日)　10：00〜16：00　沼津市立図書館視聴覚ホール
　　講師　春日真木子氏　出詠245首、参加者200人
　碑前祭・芝酒盛　６年10月16日(日)　11：00〜15：00
　　千本浜公園牧水歌碑前　参加者　約700人

文化行事
　講演　「明治期の沼津短歌会と槇不言舎」
　　講師　城　直樹氏（歌人）
　　６年８月６日(土)　14：00〜16：00　牧水記念館会議室　参加者　50人
　講演　「山崎剱二と沼津」
　　講師　岩田　峭氏
　　７年３月11日(土)　14：00〜16：00　牧水記念館会議室　参加者　35人
　朗読とギター
　　「三浦哲朗・向田邦子の短編を語る」
　　朗読　伊藤弘子氏、ギター　松本平行氏
　　６年11月19日(土)　18：30〜20：00　牧水記念館ラウンジ　参加者50人
　短歌会「雛の歌会」　講師　和泉鮎子氏、出詠　52首、参加者　35人
　　７年３月４日(土)　13：30〜16：00　牧水記念館会議室
　中学生短歌コンクール
　　募集期間　６年７月５日(火)〜９月10日(土)
　　応募歌　695首（10校）
　　入選短歌　51首（51人）
　　表彰日　６年10月16日(日)　碑前祭にて入選歌披露、表彰10人
　特別企画展
　　「沼津ゆかりの歌人歌集展」
　　開催期間　６年７月26日(火)〜８月28日　９：00〜16：30
　　牧水記念　館ラウンジ
　　共催　沼津市教育委員会、社団法人沼津牧水会
　音楽イベント　牧水記念館ラウンジ
　　「アイルランド民族楽器によるサウンドとトーク」　出演　守安　功・雅子
　　６年４月９日(日)　18：00〜　来場者　90人
　　「クラリネット＆ピアノ」　出演　赤坂達三・寺島陸也
　　６年５月28日(土)　18：00〜　来場者　90人
　　「夏の宵はボサノバで陽気に！」　出演　金沢英明・城戸夕果他
　　６年７月10日(日)　18：00〜　来場者　100人
　　「千本ファミリーコンサート」　出演　小林登・岡田俊二他
　　６年10月８日(土)　18：30〜　来場者　80人
　　「Exciting Duo」　出演　中川昌巳・福田進一
　　６年10月10日(月)　18：00〜　来場者　100人
　　「X'mas コンサート・林光の宮澤賢治」　出演　林光・安田謙一郎
　　６年12月11日(日)　18：00〜　来場者　130人
　　「アコーディオン＋ハーモニカ」　出演　御喜美江・崎元譲
　　７年３月12日(日)　18：00〜　来場者　100人

社団法人沼津牧水会定款（抜粋）

第一条　この法人は、社団法人牧水会という。

第二条　この法人は、事務所を静岡県沼津市千本郷林一九〇七番地の一一に置く。

第三条　この法人は、歌人若山牧水を顕彰し、文学的業績の研究を深め、短歌文学の普及を図り、もって、教育文化の振興に寄与することを目的とする。

第四条　この法人は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

(1) 歌人若山牧水に関する調査研究
(2) 沼津牧水祭（短歌大会及び碑前祭）の運営
(3) 文学講演会及び文学講座の開催
(4) 文学に関する各種出版物の刊行
(5) 沼津市若山牧水記念館の管理運営の受託
(6) その他前条の目的を達成するために必要な事業

第五条　この法人の会員は、次のとおりとする。

(1) 正会員　この法人の目的に賛同して入会した個人又は法人
(2) 賛助会員　この法人の事業を援助する個人又は法人
(3) 名誉会員　この法人に特に功労のあった者で、総会の議決をもって推薦された者

第六条　会員になろうとする者は、入会申込書を理事長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。ただし、名誉会員に推薦された者は、入会の手続きを要せず、本人の承諾をもって会員となるものとする。

第七条　この法人の入会金は、次のとおりとする。

(1) 正会員　一〇、〇〇〇円
(2) 賛助会員　三〇、〇〇〇円以上

2　この法人の会費は、次のとおりとする。

(1) 正会員　年額　五、〇〇〇円
(2) 賛助会員　年額　一〇、〇〇〇円以上

〈理事長〉林　茂樹
〈副理事長〉大河原二郎　杉山光男
〈理事〉上田治史　佐藤英之助　河本與司幸
浅井　治　保坂輝夫　田中和男　寺田桂子
川口和子　青木朝子　須永秀生　金子安夫
〈監事〉四方一瀰　八十濱俊一

編集後記

その気にならなくても私の心には満々と海は溢れ、潮騒が鳴っています。物心ついてからの記憶には、海は、はっきりとその刻印をしるしていました。東京、札幌、埼玉と移っても海が懐かしく都会の喧騒を千本松原に吹く浜風と間違え、巷のしがらみから抜けて海に触れたい、心を潤したいと思い通しました。今、私の海は、心の襞に刻み込んだ数えきれないキラキラした思い出ほどの、喜びや輝きを失くしていても私の心の内なる夢や冒険と連動して、まさしく私の精神の軌跡であり続けるのです。生きることは、良い思い出を作ること、ならば、確かに私は生きてきました。限りある人生を私の海は、繰り返し満ちて謳うでしょう。

社団法人沼津牧水会が若山牧水を顕彰し地域社会や教育文化の振興に寄与してきたと同じように、私にも胸を張って誇ることのできる喜びがあります。しかし、厳しく、静かに顧みると、この会にも組織の固定化や、活力不足がみえかくれして気になっていました。確たる方向性とか、かたよらない指導性をヴィヴィッドに発揮して、沼津はもちろん、全国に、沼津市若山牧水記念館と沼津文化を伝えていきたいと思います。

平成七年四月一日より事務長に就任いたしました。皆様方のご支援をお願いし、重ねて今後共お気付きの点がございましたら、是非お教え下さいますよう、ご協力をお願い申し上げます。（事務長・柴田　昌明）

■社団法人 沼津牧水会 会報・幾山河・第八号■平成７年６月１日発行■編集・発行 社団法人 沼津牧水会 会報編集委員会
■〒410 沼津市千本郷林1907-11 ＴＥＬ〈0559〉62-0424■印刷 ㈱耕文社